

箱根駅伝上位校の選手獲得と在学中の成長

スポーツビジネス研究領域
5018A014-3 大杉 栄平

研究指導教員 平田 竹男 教授

1. 背景

東京箱根間往復大学駅伝競走(以下、箱根駅伝)において上位校であり続けるためには、有望な新人選手を獲得することが非常に重要になる。学生スポーツの特徴として、選手の流動性が極めて高いことが挙げられる。毎年選手の入れ替えが行われる学生スポーツにおいて、長期的に戦力を維持し、好成績を残し続けるためには、有望新人選手を継続的に獲得することが重要となってくる。

高校においても大学においても 5000m が最も走る機会が多く、共通して取り組まれる種目であり、この記録を参考にスカウト活動も行われている。

こういった記録をもとに選手獲得を行っているが、大学ごとに入試制度や系列校の有無に違いが生まれるため、選手の獲得方法や人数は異なる。大学によっては多数の選手を安定して獲得することができないため、戦略的に選手を獲得する必要がある。

原は大学駅伝で勝利のためには 5000m の自己記録を更新させることが重要であると述べている。5000m の自己記録を更新させることで高校の指導者との信愛関係を構築することで、良い選手を獲得することができると言っている。

大学駅伝の新人選手獲得状況や在学中の成長を明らかにすることは、大学駅伝および日本長距離の発展に寄与することができると考えられる。

2. 目的

本研究の目的は箱根駅伝で 5 位以内に入ったチームの特徴を明らかにすることである。

3. 手法

【対象期間】

青山学院が初優勝したメンバーが入学した 2011 年から 2018 年までの 8 年間を対象とした。

【対象校】

対象期間中に箱根駅伝で総合 5 位以内に入った 10 大学(青山学院、神奈川、駒澤、順天堂、帝京、東海、東洋、日本体育、明治、早稲田)を対象とした。

1) 出身校・高校ベスト記録調査

文献から、対象大学に進学した高校生の出身高校と高校在学中の 5000m ベスト記録を調査した。高校ベスト記録のランキングは前年の箱根駅伝予選会 15 位以内(2011 年のみ 14 位以内)の大学を対象としたランキングを使用した。

2) 箱根駅伝出場選手輩出状況

文献から、2015 年～2019 年の箱根駅伝に出場した選手各 50 名の出身高校を調査した。なお、明治大学は 2018 年に箱根駅伝出場を逃しているため、40 名を調査した。

集計方法は実際の部員の人数ではなく、各部員が箱根駅伝に出場した回数で集計を行った。

3) 箱根駅伝出場選手輩出状況

文献から、2015～2019 年の箱根駅伝に出場した選手各 50 名の出身高校を調査した。なお、明治は 2018 年に箱根駅伝出場を逃しているため、40 名を調査した。

集計方法は実際の部員の人数ではなく、各部員が箱根駅伝

に出場した回数で集計を行った。

4) 箱根駅伝出場選手の在学中の成長

文献から、2015～2019 年の箱根駅伝に出場した選手の在学中の 5000m、10000m、ハーフマラソンの記録の伸びを調査した。

5) 三大大学駅伝出場状況

文献から、出雲駅伝、全日本駅伝、箱根駅伝に 4 回出場している選手の人数と出身高校を調査した。また、全ての駅伝に 4 回エントリーしている選手の人数と出身高校を調査した。

6) 代表輩出状況

文献から各大学の日本代表クラスの選手の輩出状況を明らかにした。

以上から 10 大学の出身校の傾向と各大学の選手獲得状況を明らかにした。

4. 結果

1) 高校ベスト記録調査

5000m のランキングで 5 位以内に入った学生は東洋が 0.8 名を獲得しており、最も多かった。次いで青山学院、駒澤、東海の 0.6 名となっていた。神奈川、帝京、日本体育には 5 位以内の選手は入っていなかった。2018 年以外は 60%以上の学生が 10 大学に進学していた。

10 位以内に入った学生は駒澤が平均で 1.5 名を獲得しており、最も多かった。次いで青山学院の 1.5 名、東洋の 1.2 名、東海、明治の 1 名となっていた。すべての年で 60%以上の学生が 10 大学に進学していた。

50 位以内に入った学生は青山学院、明治が平均で 5.1 名獲得しており、最も多かった。次いで東海の 4.8 名、東洋の 4.1 名となっていた。青山学院、明治は 5 年、5 名以上の選手を獲得していた。帝京、日本体育は 5 名以上獲得したことがなかった。すべての年で 50%以上の学生が 10 大学に進学していた。

100 位以内に入った学生は青山学院が平均で 8 名を獲得しており、最も多かった。次いで明治の 7.9 名、東海の 7.3 名、駒澤、東洋の 6.5 名となっていた。帝京が 2.7 名で最も少なかった。すべての年で 50%以上の学生が 10 大学に進学していた。

150 位以内に入った学生は東海が平均で 10.1 名を獲得しており、最も多かった。次いで青山学院の 10 名、明治の 9.1 名、駒澤、東洋の 8.4 名となっていた。早稲田が 5.1 名で最も少なかった。2011 年と 2013 年以外の年では、50%以上の学生が 10 大学に進学していた。

2) 出身高校調査

青山学院には 65 校から進学し、九州学院が 9 名で最も多かった。次いで世羅の 7 名、豊川の 3 名となつた。九州学院からは 2018 年以外選手を獲得していた。

神奈川には 47 校から進学し、愛知学院愛知が 7 名で最も多かった。次いで西脇工と鳥栖工、藤沢翔陵の 6 名、藤枝明誠、高知農の 5 名となつた。

駒澤には 62 校から進学し、駒大が 5 名で最も多かった。次いで伊賀白鳳、一関学院、駒大、大分東明、豊川工が 4 名、花崎徳栄、市船橋、西脇工、青森山田、倉敷の 3 名であった。

順天堂には 106 校から進学し、前橋育英、浜松日体が 5 名

で最も多かった。次いで小林、世羅、大牟田の4名、高崎、佐野日大、専大松戸、田村、白石、富山商、福岡大附大濠、洛南、諫早の3名となった。

帝京には80校から進学し、清風、加藤学園、東北、前橋育英が4名で最も多かった。次いで八戸学院光星、市船橋、光明相模原、市柏、西条農、大分東明、那須拓陽、武蔵越生の3名となった。

東海には73校から進学し、佐久長聖が8名で最も多かった。次いで八千代松陰の6名、伊賀白鳳、須磨学園、西脇工、九州学院の5名となった。

東洋には72校から進学し、東農大三と那須拓陽が4名で最も多かった。次いで学法石川、武蔵越生、浜松商、遊学館の3名となった。

日本体育には97校から進学し、大牟田が7名で最も多かった。次いで西脇工、九州学院、豊川工、洛南の5名、浜松日体、千原台、島田の4名となった。

明治には51校から進学し、須磨学園が9名で最も多かった。次いで国学院久我山の6名、洛南、世羅、浜松日体、倉敷の4名となった。

早稲田には71校から進学し、早稲田実業が8名で最も多かった。次いで佐久長聖の5名、時習館の4名となった。

3) 在学中の成長

5000mにおいては帝京が最も記録を伸ばしており、明治は記録の伸びが最も少なかった。

10000mは帝京が最も記録を伸ばしており、東洋は記録の伸びが最も少なかった。

ハーフマラソンは駒澤が最も記録を伸ばしており、神奈川は記録の伸びが最も少なかった。

青山学院と日本体育は全種目で10大学平均以上の伸びを記録している。

青山学院は箱根駅伝に出場した選手全員が在学中に5000mのベスト記録を更新していた。日本体育は全員が10000mの記録を更新していた。

帝京と日本体育は全種目で記録未更新者数が10大学平均以下となっていた。

表1 在学中の記録の伸び

	青山学院	神奈川	駒澤	順天堂	帝京	東海	東洋	日本体育	明治	早稲田	10大学平均
5000m	00:19.83	00:15.49	00:19.72	00:19.14	00:20.59	00:20.51	00:14.25	00:19.52	00:11.19	00:14.38	00:17.46
10000m	01:06.53	00:48.85	00:43.54	00:48.17	01:07.53	00:44.61	00:36.28	00:54.38	00:56.53	00:39.89	00:50.63
ハーフマラソン	0:02:09	0:01:18	0:02:18	0:01:55	0:01:19	0:01:41	0:01:37	0:01:57	0:01:19	0:01:29	0:01:42
記録未更新人数	0	6	4	2	2	2	6	2	7	4	3.5
記録人更新人数	4	2	8	1	2	4	4	0	2	2	2.9
記録未更新人數	6	7	2	8	4	8	5	4	11	7	6.2

5. 考察

1) 10大学の傾向

表2 各カテゴリー別平均獲得人数

	青山学院	明治	東海	東洋	駒澤	早稲田	順天堂	神奈川	日本体育	帝京
5位以内	0.6	0.4	0.6	0.8	0.6	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0
10位以内	1.3	1.0	1.3	1.1	1.3	1.1	0.4	0.1	0.4	0.0
50位以内	5.1	5.1	4.8	4.1	3.8	3.4	2.8	2.3	1.5	0.6
100位以内	8.0	7.9	7.3	6.5	6.5	4.5	5.5	4.9	4.8	2.6
150位以内	10.0	9.1	10.1	8.4	8.4	5.1	8.0	7.0	6.5	6.1
151位以降	2.5	1.8	7.1	5.6	3.5	8.3	9.4	5.1	12.6	9.1

青山学院、明治、東海、東洋は50位以内の選手を平均で4名以上獲得することに成功している。これは箱根駅伝のエンターリー人数である16名を50位以内の選手で確保できており、選

手層が厚いチームといふことができる。

駒澤、早稲田、順天堂は50位以内の選手を平均で2.5名以上獲得することに成功している。これは箱根駅伝の出場人数である10名を50位以内の選手で確保できることになる。

神奈川、日本体育、帝京は50位以内の選手を平均で2.5名以上獲得することに成功していない。これは箱根駅伝の出場人数である10名を50位以内の選手で確保できず、選手層が薄いチームといふことができる。

また青山学院、東海、駒澤は10位以内の選手を平均で1.25名以上獲得することに成功している。これは箱根駅伝の往路出場人数である5名を50位以内選手で確保できることになる。2015年～2019年の大会においては往路優勝したチームが総合優勝を果たすケースが3回あり、往路の結果が重視されるようになってきている。この3大学は往路にもともと実力のある選手を配置することができる大学といえる。

2) 出身校から見る各大学の選手獲得戦略

帝京は箱根駅伝出場者出身高校の上位校が他大学と重なっておらず、独自のリクルーティングを行っていた。この上位校は全国高校駅伝で入賞しているわけでもないため、独自で有力選手をみつけ獲得できていると考えられる。高校時代の上位選手を獲得できない場合は独自のリクルーティングを行い、大学で伸びる選手を獲得することが必要になる。

青山学院、駒澤、東海、東洋も他大学と重ならずに選手獲得を行うことができている。青山学院、駒澤、東海は重なりのない高校に全国高校駅伝で入賞する強豪高校を含んでいる。強豪高校と結びつきを作ることで安定して有力選手の獲得を行っていると考えられる。

強豪高校から他大学と選手を取り合うのではなく、高校と信頼関係を築くことで重なり合うことなく選手を獲得できる環境を作ることが重要となる。

3) 出場選手全体の記録の向上

箱根駅伝4連覇を果たした青山学院は10000m、ハーフマラソンで最も記録を伸ばしており、長距離への適応ができているといえる。一方ですべての選手が5000mのベスト記録を更新しており、スピードが強化されたうえで長い距離への移行が行われていると考えられる。東海大学は5000mで最も記録を伸ばしており、近年は中距離選手を獲得するなどスピード強化に取り組んでいる。

4) ハーフマラソンにおける記録の向上

青山学院、駒澤、東海、東洋はハーフマラソンにおける記録の向上が際立っているチームであった。駒澤、東海、東洋の選手はOBを含め、多くの選手が世界大会に出場するなど日本を代表する選手に成長している。日本代表になるような選手を輩出することにより、青山学院、駒澤、東海、東洋は選手が成長できる大学のイメージをつくり、高校との信頼関係を構築でき、より上位選手の獲得にも結び付いていると考えられる。

6. 結論

箱根駅伝で上位に進出するためには、

- ・世代別の5000mランキングで10位以内の選手の獲得と50位以内の選手の人数の確保

- ・他大学と重ならず全国高校駅伝の入賞校から選手を獲得

- ・ハーフマラソンにおける記録の向上

が重要であることが明らかになった。

また、上位選手が獲得できなかつた際には、同一レベルの選手を獲得し、練習負荷を均一化させることで、全種目の記録を向上させることが重要であることがわかつた。